

丹波三代泡沫の記

理工学部理学科教授 泉 脩 藏

そのかみは峽の度敷にたぎる雲

私の郷里は京都府の西部、中丹波の由良川中流域である。旧地名では京都府何鹿（いかるが）郡中筋村大字延小字鳥居壺番地となる。やがて綾部町等と合併して綾部市となった。1940年に生まれてから1960年に大学に入るまで、小学後半の4年間を除いてこの地で暮らした。

以下に記すことは、明治・大正・昭和三代、私の身辺の人々の話題の記録である。私事の泡沫（うたかた）であるが、一つ一つ時代を経た固有の貌を持っており、興味を持っていただけそうなものを選んで文字にしておくことにした。消えようとしているものの記録ということで、図書館報の場を拝借することをお許しいただきたい。

1. さくの話

さくは祖母であるが、実際は父の親戚で私と直接血はつながっていない。祖父が「電車の運転手になる」と言って家を出ていったとき、父の3人兄弟とその母を引き取り面倒を見たという。家族のうちでさくだけは綾部の士族の家に生まれたが、親は明治に入って没落し、本人は京都の仏具師のところに奉公に出たという。仏像に金箔を貼るための竹べらなどを納めた道具箱などが長く家に残されていた。士族の誇りが彼女を支えていた。私たち兄弟の時代になっても、日頃「寝るときは、いざと言うときに備え、服をたたんで枕もとに揃えて置きな」、「畳の縁（へり）は早う傷むで踏んだらあかん」、「敷居はその家の主の頭やで踏まんようにせんと」などの注意を受けていた。「士（さむらい）は人の首を切るとき胴

から離れんように皮を少し残すんや」というような作法も授けられた。分けても印象に残っている話は次のようなものである。

狼は人を襲うとき、その人を取り囲み、まず一匹が頭の上を飛び越える癖がある。だから士は狼に取り囲まれると、針を取り出し頭の上に針先を上方に向けてさす。飛び越える狼の腹がそれで裂かれて難を逃れることが出来る。狼も片腹痛いことであろう。

彼女の話はしばしば固有名詞つきの教訓であった。「何処其処の誰某は怠け者で……。終いには布団も売って、冬でも蚊帳に包（くる）まって眠るようになった」。

明晰な人であったが、その時代の人らしくフィクションと現実の区別が定かでなかった。我々兄妹は小言を言われると何でもかんでも「それは迷信や」と口答えしていた。

さくの夫は、喜之助といい、私は彼と同じ空気を吸ったことはないが、親分肌の人であったという。彼は大きなコンビニのような何でも屋を営んでいた。床下には「どぶろく」を仕込んだ壺が隠されていたという。税務署員が検査のため竹竿を床下に入れて探り、それが床下の窪みに隠された壺に当たって音がするのだが、同居していた父の実母、つまり私の父方の祖母、が美人だったので気づかぬふりをして見逃してくれたという。

この祖母は、叔父の言葉によれば教育ママのはしりで、オックスフォード大学だったかケンブリッジ大学だったか忘れたが、そうしたところへ子供を入れるのだと言っていたそうだ。時代は大正であろうが、草深き丹波でそのような大学の名が一流校として流布していたのである。

さて話によると、喜之助が建てたという店舗付き住宅は「勝てば一山の木を自由に伐ってよい」という賭けを行い、それに勝って建てたという。ツツジの太い床柱もあった。ツツジであることの真偽は知らないが、黄色い艶を持ってくねくねと曲がり、瘤を持ち空洞もあって、あれほど格好の良い柱を見たことがない。残念なことに、昔の建築の背丈に合わせて切られていて今の家には短すぎるという話を聞いた。

次の話は喜之助の話であるのか、私の記憶は定かではない。彼は由良川の夜釣りに出かける趣味があった。ある晩、思いきりたくさん魚が釣れた。稲光の強い夜であった。釣れた魚は背後の河縁に掘った水に入れていた。帰るとき見ると一匹もいなくなっていた。狐狸の類の仕業である。寒い夜には家の近くを狐が鳴いて通るのがよく見られたと父も述べている。由良川には深い淵もあり、そこに潜って大きな魚をヤスで突くことも行われた。



由良川中流（綾部市井田付近）
竹藪に縁取られ、自然や古い集落が残る。
写真中央は、緩やかな堰となっている。

ある人はやはり途方もなく多くの魚を突いて捕り、さらにウロと呼ばれる岸のえぐれた奥を探した。奥には数多くの赤ん坊が居たという。

藪の下竹が河になだれ込んでいところは昼も暗くて本当に不気味であった。由良川は竹藪など自然が残り、針金を編んで石を詰めた蛇籠（じゃかご）程度の護岸が多い半自然河川であった。

喜之助の立てた大きな家は、私の子供のころ既にあばら家となり、コンビニのなごりで

琺瑯（ほうろう）製の塩や仁丹の看板、砂糖を包装する鶴の模様の包装紙や紙箱等が残されていた。この紙は物の無い終戦後とくに重宝であった。喜之助は芝居が好きで芝居を呼んでくるほどであったという。納戸にはその芝居に用いたという三味や太鼓も埃にまみれて転がっていて、私達の風変わりな玩具となった。

2. 仁一郎の話

私の父である。商業中学の英語の教師から始め、自分の妹夫妻の跡を追って傀儡国満州に渡ってそこの役人となり、以後いろんな種類の月給取り、実に13の職に就いている。彼の人生の得意曲線は見事な山形を描いた。彼の言によると、哈爾浜（はるびん）で露人の娘さんと一緒にスケートを楽しんだ日、銀座の料亭で飲み歩く日々、綾部の山裾を喰（まむし）に気を付けながら通う日までいろいろな経験をしている。小さいときから悪童であったという。家の横にかかる橋は交通の要所にあった。ある中年の男が私の母に次の様にほやいたそうである。「子供のときあの橋は嫌やった。悪い兄弟が飛び出してきて石を投げたりしていじめられた。それがあんたの旦那さんの兄弟や」。ちなみに、私の子供のころでも、石を投げることは村の子供達の挨拶みたいなものだった。隣り村に入ると、たとえそれが学校からの遠足であっても、地元の子供から石が飛んできたものである。ニューギニアや南米の民族の儀式的な戦争に似ている感じもある。

仁一郎で興味深いのは火の玉を数多く目撃している事である。

その紹介に先立ち、すこし私どもの住んでいた家の場所を説明しておこう。最初に述べた鳥居壱番地は、綾部と福知山を結ぶ福知山街道と中筋村の集落を結ぶ道路の交差点であった。夜の旅人にとっては、道に迷う難所であったと言う。「目の前に壁ができて進めないで休ませてもらえんかいのう」とか、「その橋を渡ろうとすると川に火の玉が流れてきたのでちょっと入れてくだされ」というような旅人がしばしば戸を叩いたそうである。

かくして一帯はイバタグロ(?)と呼ばれて恐れられていた。安場川という谷川と前川という人工水路が立体交叉する水の十字路でもあった。安場川の川底に穴があけられて、前川に水を落とす仕掛けになっていた。稲に水が要る季節であろうか、その穴に吸い込まれる水が渦をつくり、夜通し異様な音を響かせていたものである。

父は次のような話を残しているが、このような話をするとき様子は控えめで、少なくとも彼自身にとってはすべて真実であったと私は考えている。

- a. 仁一郎が夜、二階の屋根から小便をするときしばしば火の玉を見たと言う。私も同じところで異様にゆっくりと水平に飛ぶ大きな火を見た。私の場合は飛行経路が直線に近かったから流星と察しが着いた。
- b. 小学生のころ校庭で生徒の群れる運動場に突然つむじ風が吹き始め、その風の中に青白い火の玉が走るのを集団で目撃したそうである。これは明らかに球電と呼ばれる現象であろう。
- c. もう一つも集団目撃である。風呂に入っているとき、近所の人が騒ぐので窓からのぞくと、四尾山(よつおやま)の裾に灯りが明滅しながら並び、その列が長く伸びたり、ボトボトと消えたりしていたと言う。これも典型的な「狐の嫁入り」である。この山は私の家から1kmほどのところにある。戦後、その山裾に崖の粘土を利用する茶碗工場が作られた。そこに住みついた同級生が「夜中になると崖にいっぱい光が走りまわってにぎやかや」と言っていたことと符合する。
- d. 小学校の半ばから一家は父の仕事の関係で東京に引っ越していた。しかし私が中学生になるころ、父の運も傾きはじめ、東京を離れて一家で郷里綾部に戻った。その年に地方最大の水害「台風13号」が襲来したのである。私の家は安場川の小河岸段丘上にあり助かったのであるが、本村の被害はすさまじかった。家は、流されたものがあつたことはもちろん、材木がぎっしり飛び込んだ家もあった。台所と便所も同じ泥で覆われ墓は暴かれた。当時

は土葬であったから、墓から流れた遺体が数日後電柱から落下したと言う話もある。どうして分かったのか、この遺体には私の知っている固有名詞がついていた。仁一郎は水害復旧対策委員と言うような役を仰せつかり、何日も働いていた。夜更けに仕事を終えて委員二人で立小便をした。父の目の前の河川敷の藪の高い位置に見なれぬ灯が揺れていた。「『Hさん、あれなんやろうの』・・・Hさん、よう顔上げなんだいやあ。」



四尾山(綾部市街地の西南)
正面が「狸の砂播き」現場で、右端が「狐の嫁入り」現場。

- e. これは火の玉の類ではないが、やはり奇譚の類型に合致している。ある時期、仁一郎は自転車通勤していた。「昨日は妙な事があつたいやあ。・・・宮代の山裾を通るとき風が全然ないのに山の樹がざあざあと鳴りつけて気持ち悪かったわ。『狸の砂撒き』言うんや」。

この仁一郎、1940年代の末であろうか、綾部町の助役を勤めたことがある。市長と町の表札を盗って歩いたとか、二人で取っ組み合いをして料理屋の階段から落ちたとか、とんでもない話がある。しばしば幌付のオープンカーで帰宅したが、どう考えても無免許であつただろう。今ならどれ一つでも大事である。そういう事が問題とされない時代であつた。

そのころの助役としてのまともな仕事も一つ書いておこう。綾部市は中学を建設する事になった。場所は上で述べた狐火や狸の砂撒きの舞台となつた四尾山の山腹が選ばれた。彼は舞鶴に駐屯する米軍のところに赴き、演習のかたちで整地に出動する事を依頼した。OKはとつた。しかし舞鶴から綾部に入ると

き由良川を越えなければならないのだが、並松の大橋がブルドーザーの重量に耐えるかどうか、そのことを心配していた。それからしばらくして、山の高台の上で、工作機械の近代未聞の轟音が連日とどろきわたった。町人、村人一同、アメリカの威力を実感したのである。

3. 正子のお話

正子は私の母である。女子専門学校の文科学系で学んでいるが、本人は医師になりたかったという理科学系志望。幼くして母を無くしており、自身について語るところは殆んど無かったが、皮肉屋で生き物と数学が好きなことは私が受け継いだ。

正子の父すなわち私の母方の祖父、光治郎は身体頑健で近衛兵であったという。彼は京都と綾部を行き来して商品売買を行っていた。生糸やお茶の類であろうか。あるとき彼は峠で追いはぎに遭った。彼は小用がしたいといって賊の許しを受けた。（またまた、小用の話で失礼。）そのとき一物にいささかもおびえが無いのを見て、盗賊は逆に恐れを覚え、そのまま放免したという。どういう神経を持っていたのであろうか。古典的追いはぎは明治までは存在していたようである。私はこの祖父に出会ったことがあるが、子供好きの定評どおり、タバコの火のついた方を咥えて「アチアチ」と道化て見せてくれたのを覚えている。

私の姉は宣子という。私が2、3歳のころ赤痢で死去した。赤痢は法定伝染病であったから避病院に隔離された。当時の医学では、水は「下痢を助長するものであるから飲まないようにせよ」とされていたらしい。今は「脱水が起こるからたっぷりとれ」ということになっている。宣子は水を非常にほしがり、水の入った瓶を握り締めて死んだそうである。母はその不合理を感じていたが、なす術がなかった。

後に私も赤痢にかかった。母は前の経験を繰り返すまいと自宅にかくまうことに決心した。父が助役を勤めた当時の町長であり医師でもあったA氏に相談し、その指導のもとで嚴重

な消毒を行い看病し、私は生還した。しかし足が棒のように細くなり歩けないので、しばらく乳母車に乗せられていた。

4. 私自身の話

戦争のことは少し覚えているが過酷な体験をしたわけではない。夜、軍港舞鶴を守るサーチライトが山の向こうをしきりに動くのを見た。後年、舞鶴にあった海軍機関学校をでた近大での同僚から「爆弾が落ちたあとの整理に赴き、目撃した倉庫の内部は自分の人生観を変えるほどの惨状であった」と聞いた。

また終戦直後、近くの山中から翼をはずした飛行機がたくさん引き出されてきて、驚いたこともある。本土決戦に備えて、洞穴に隠されていたのであろう。

私達の夏の宿題は蝗（いなご）をとることであった。一升瓶の中に封じたり、糸をつけた針で突き刺して数珠繋ぎにした。これを吊るしておくとい長い間生きていて夜中も足を動かしていた。

これを学校に提出するのが宿題である。これには害虫退治とは別の大切な意味があった。精粉所におくり、加熱して乾燥させたものを粉にしてもらうのである。これが味噌汁などに添加されて生徒の栄養源となった。私は少々気持ちが悪かったが、友達多数には大人気であった。給食はやがてララやユニセフによる物資が中心になっていった。甘いものといえば飴玉がどうにか登場したという程度の我々に、缶詰のフルーツジュースやブルーンの干したものは夢のような味であった。

2年生のころであろうか、担任は額に鎌鼬の傷跡を持つ颯爽とした女性であった。一度、学級で綾部駅の見学に行ったことがある。進駐軍の兵士が我々にチューイングガムを与えた。すばしこい連中が何人かそれをせしめ、生命力の希薄な我々は羨望の念を持って見ていた。すると先生はそれをすべて没収された。私は当時よく言われた「卑しい事はするな」という意味かと推測した。教室に戻ると先生は包丁と組板を取り出して仰った。「皆さん、民

主義の世の中になりました。みな仲良く平等にしなければなりません」。そして何粒かの小さなチューインガムをクラス全員に等分に分けてくださったのである。一粒の何分の一かであったが、後にハリスのチューインガムとして知ることになる、白く硬質に光る糖衣のチューインガムであった。

私達の年代の話題の中心は、今も食べ物である。